

熊本乃地名

ニユースレター

発行者 熊本地名研究会
会長 木崎康弘

題字 松野国策 書

清正公ゆかりの跡 諸所に

土木事業に
町割、お寺 業績偲びながら歩く

城下町歴史散策



白川と坪井川を分けた石塘の前で
(後ろは近代の堰の遺構)

坪井川園遊会事業の一つ「城下町歴史散策」は5月2日、「清正公さん縁の通りをさるく」と題して、熊本地名研究会と一新まちづくりの会の案内で、古町、新町など加藤清正ゆかりの跡を訪ねて歩いた。清正公さんで親しまれている清正が築

いた熊本城の城下町。築城に当たり古町と新町に異なつた町割りとは道筋の町を造り、それぞれの町に防御の役割を持たせた。古町の細工町は清正が最初の商人町として造り、新町にある高麗門町と新細工町もこの細工町懸かりの中に含まれていた。清正の業績は挙げればきりがながい、今も残る城下町の形成もその一つだ。

この日は、熊本駅前に参加者62人(ガイド等関係者含む総勢79名)集合。坪井川園遊会・岩田会長、熊本地名研究会・木崎会長あいさつの後、午前9時に一行は4班に分かれて出発。最初の見学先である石塘に向かった。石塘は日本最古の分流工事の一つと言われ、土木の神様といわれる清正の面目躍如たる事業だ。祇園橋を渡り古町地区に入る。古町は基盤の目状の町割り、主に町人が住み、各町に寺が置かれた(一町一寺)。一行は町割りを感じながら阿弥陀寺など三寺を訪れた。坪井川を渡って新町地区に入る。



12歳で亡くなった阿蘇惟光の墓の前で
(阿弥陀寺)

新町は古町と違って短冊型の町割り、遠見遮断と呼ばれるかぎ型の道筋となっていた。町の周りには5つの門があり、人々の出入りには制限があった。その一つ高麗門跡は広場として整備され、根固め石の跡や説明板に見入り、往時を偲んだ。旧高麗門町にある長光寺では、土人形の型が寺内で発見された経緯やその文化的価値について住職自ら説明された。江戸時代一帯は人形師の町として隆盛を極め、博多人形にも多大な影響を与えたという。住職は人形の再興を願っていると語った。その後、一新校近くの下水道跡を見学。現在はただの排水路として半ば放置されているが、文化財としての整備を地元では望んでいるという。その後、清正時代から続く「兵庫屋」、そして古城堀を見学して城形苑に着いた。参加者の一人は「一つ一つ説明を聞きながら歩くと、町の歴史がよくわかり、いい経験になった」と話した。晴れ渡った春空のもと、一行は清正公とその遺産の数々を肌で感じながら歴史散策の半日を

地名研究会 告知板

6月 行事日程

❖例会 「肥後宗像ファミリーヒストリー」
多良木町主任学芸員・上村麻妃氏

6月28日(日) 午後1時30分
パレア会議室6

❖勉強会 テキスト「地名の研究」柳田國男著
6月13日(土) 午後1時30分～
パレア会議室5

*地名研ブログでも
会の活動や関連
ニュースを発信中



楽しんだ。

(以下は、熊本地名研究会・毛利秀士副会長作成の説明資料より引用)

① 石塘 (いしども)

慶長7(1602)年の白川大洪水の時に城下町が泥水化したので、清正は旧坪井川が城下で白川に注いでいたのを、石塘を築いて分流し旧坪井川の水を高橋方面に注がせた。そして同時に設けたのが「石塘堰」である。工事に当たった大工の棟梁善藏は「聞覚控」に「言うにや言われんほどきつかった」と述べている。その後、寛永10(1633)年松井寄之が大工事を行い、下流の白坪地区590餘が灌漑された。

② 阿弥陀寺 (あみたてら)

大寶3(703)年行基の開基。鎌倉時代に浄土宗鎮西派蓮阿上人が再興。もとは(2ページへ続く)